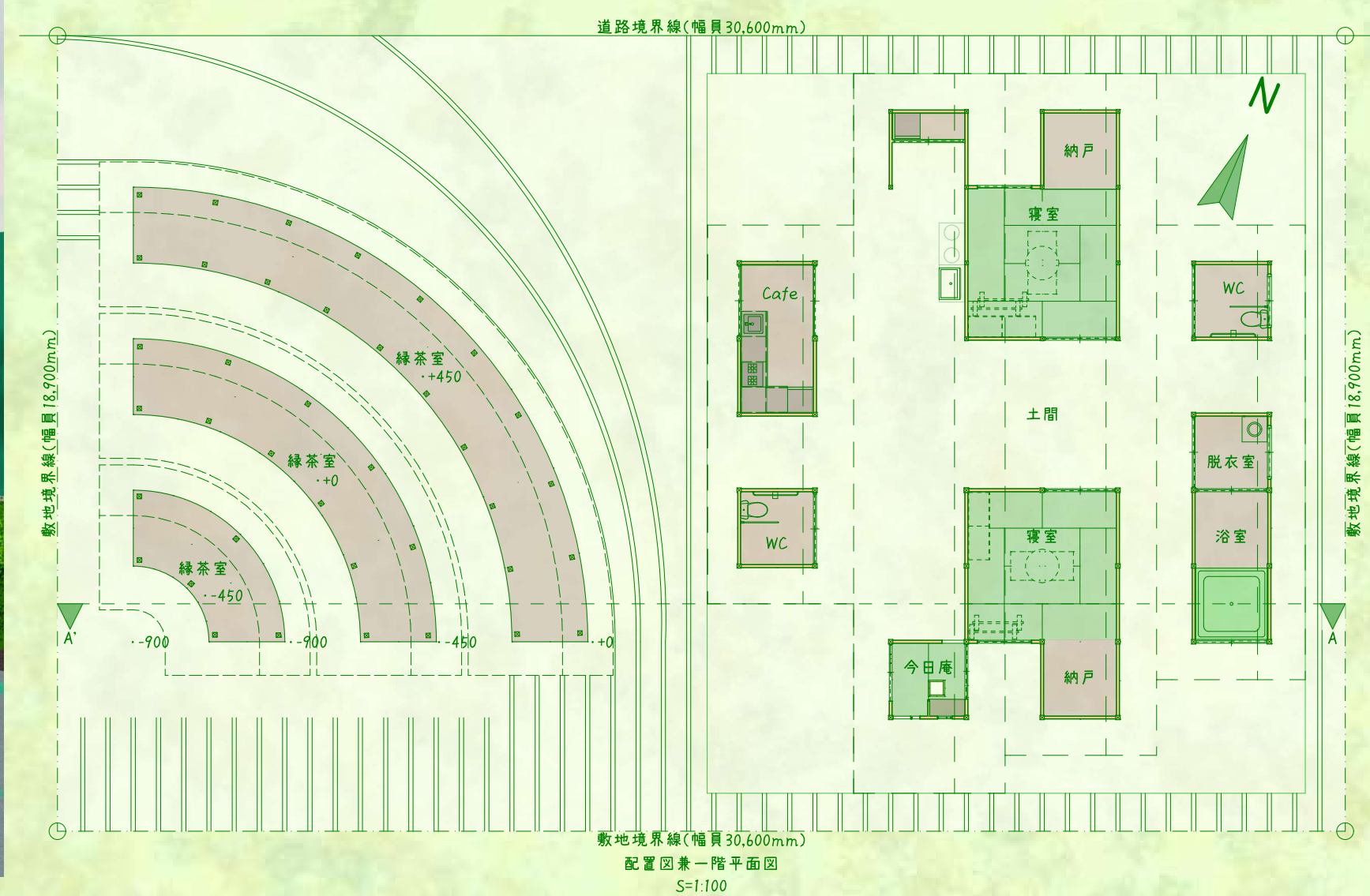
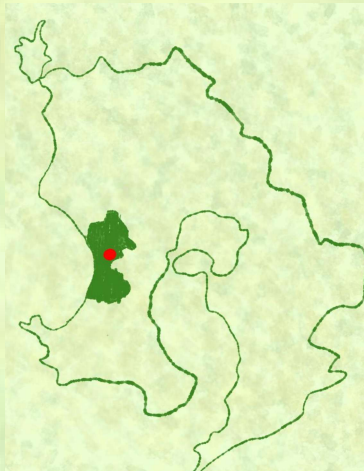


茶縁



鹿児島県

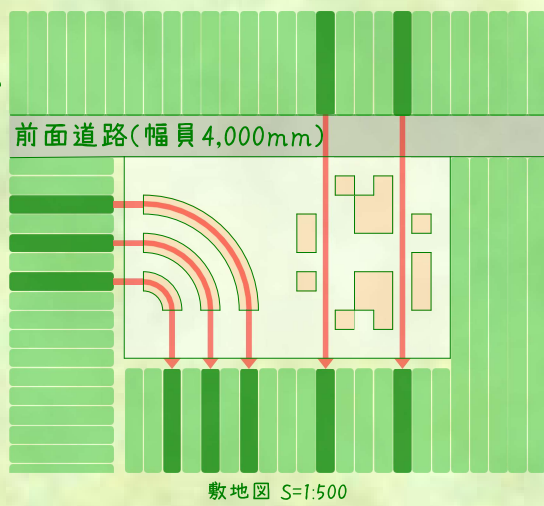
鹿児島県には、桜島をはじめとする豊かな自然や畜産、温泉など様々な特色がある。中でも注目したいのが茶栽培である。令和6年より、鹿児島茶の生産量が静岡を上回り、初めて全国1位となった。鹿児島県は、全国の茶生産量の40%程を占めている。知覚をはじめ、全域で茶生産が盛んな県である。



地域設定

今回、鹿児島県日置市伊集院町飯牟礼の敷地に設計する。日置市は、妙円寺詣りなどの伝統行事や、吹上浜などの自然が魅力的な町である。その中で今回、お茶についてピックアップした。日置市では、様々な場所で茶栽培が盛んに行われている。生産量こそ知覧などに劣るものの、日置では県内で数少ない釜炒り茶(はんす茶)の製造が行われている。

飯牟礼は海拔140mほどの高台に位置し、朝方は霧が濃く、神秘的な情景を作り出す。広大な茶畑が広がっており、西側には矢筈岳、諸正岳といった2つの山がある。自然をふんだんに楽しめる敷地であり、その自然や静けさをふんだんに生かせる設計をしたい。

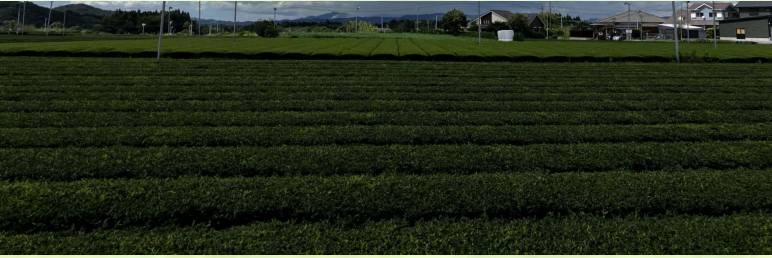


設計趣旨

今回、飯牟礼に広がる茶畑の中に、茶畑とつながる空間を設計する。建物は茶畑の地形や植栽に調和するよう、茶木の幅である一間というグリッドを用いた。東側の建物の中心には広い土間を設け、敷地の南北の茶畑を通り土間でつながるようにし、茶畑での作業や地域交流、家族の団場の場として多様に活用できる空間としている。また、西側の円弧状の建物では、直交する茶畑を一間幅の帯でつなぎ、茶畑と一体化になるよう設計した。和室は茶の文化を継承しつつ、現代の暮らしに対応する柔軟な設計と、茶殻を使った建材を用い、環境負荷を抑えながら地域経済にも貢献する住まいとした。

茶畑の様子

茶畑は野菜畑や、水田などとは異なり、美しいストライプ模様を見ることができる。幅が約一間である茶木が規則的に並び、畑に方向性が生まれる。今回、この方向性や幅が一間であることを、古来の日本建築に適用して茶畑と一体化した建築をしたい。



飯牟礼にある茶畑

茶について

茶は、涼しい地域でより旨味の強い茶を生産することができる。また、朝霧が立ちやすい地域も、適度に直射日光を遮り、茶の旨味が増すのを促進する。そのため、飯牟礼のような標高が高いところや、河川の上、中流域に茶畑が点在する。

製造については、緑茶の場合、ほとんどが蒸し茶である。収穫後、茶葉を蒸すことで、緑色を保ったり、酸化を防いだりする。一方、飯牟礼では、釜炒り茶(はんす茶)を多く製造している。これは、蒸す代わりに釜で煮ること、さっぱりとした味わいになったり、蒸しにはない釜の風味を感じられったりする。

熱処理を行った後に、茶揉みという工程がある。乾燥のために揉むのだが、非常にやりやすい工程であるため、一般人でも茶揉み体験を行っているところも多々ある。



緑茶室 座った時の目線パース



緑茶室の先端から見た西側の茶畑の様子
(右から左にかけて、床高さが下がってゆく)



京都 今日庵の写し茶室



南北方向に抜ける土間と直交する土間空間 居住者のくつろぎ



南北に抜ける土間 作業風景

新しい茶室

今回のテーマである地域に根ざした新しい和室。私たちは、この緑茶室を新しい和室、茶室として提案する。本来、和室とは、屋内であるが、この緑茶室は完全な屋外である。

なぜ、これを和室としてとらえるか。私たちは、ここに来たお客さんや、農作業で疲れた近くの農家さんたちにこの緑茶室で飯牟礼に広がる茶畑を眺めながら、お茶を楽しんでほしいという願いから、この空間を設計した。お茶を楽しむという目的は、屋内にある普通の茶室と変わらない。

お茶を楽しみたいという想いを存分に持ち合わせるこの空間は、屋外であっても、利用者に深く親しまれるだろう。

緑茶室

直交する茶畑を繋げるように円弧状の空間を設計した。これは、三本の帯のような形で茶畑をつなげている。茶畑の幅である一間を採用して、この緑茶室の幅も一間で構成される。それぞれの建物の高さを変えることでいろいろな景色を楽しめるようにしている。この空間では、カフェで買ったお茶を飲みながらくつろぐことができる。壁を張らず、柱と屋根だけで構成された空間は、茶畑を肌で感じることができる極上の空間となる。

茶畑にもぐってみる

緑茶室は、3本の帯から構成されているが、これはそれぞれ、高さが違う。一番高いところと低いところの差は90cmほどあり、見え方は全く違う。一番高いところは、茶畑を見下ろして見ることができる。一方で、一番低いところは、自分の目線よりも茶木のトップの方が高くなるため、茶畑の中に入り込んでしまったかのような感覚に陥る。場所によって見える景色が異なるため、その日の気分で楽しんでほしい。

京都 今日庵

今回、この敷地に今日庵にある茶室を写しとして詰め込んだ。京都府京都市には今日庵という建物があり、今日庵の一角に一畳台目の茶室空間が存在する。この茶室は千利休の孫、宗旦が作った。宗旦は宝飾宗旦と呼ばれるほど簡素簡略の境地、「わび」を追求した。「わび」とは、質素なものの中に奥深さや豊かさなど趣を感じる心、日本の美意識を表すものである。一畳台目の茶室は、手前座と客座が一畳ずつで、床の間さえもなくした、最小の茶室となっている。これこそ、究極の茶室と言える。

取り組み

茶畑の中に位置するこの建物は、Cafeを一つの目的として建てられた。飯牟礼地区のお茶の普及のため、お茶農家の老夫婦とその息子夫婦が経営する。Cafeとしている部屋では、商品の販売をするのに限り、飲食する場所は緑茶室や一畳台目の茶室として敷地全体でお茶を楽しむ。また、Cafeのイベントとして、大きな土間を活用し、お茶の製造工程の一部を体験できる機会を提供する。また、お茶を身近に感じることができ工夫として、この家では、製造過程で生まれる茶殻という廃棄物を使用した壁材を適用している。脱臭効果などがあるのはもちろん、ほんのり茶の香りがし、茶を身近に感じることができる空間となる。

繋ぐ土間

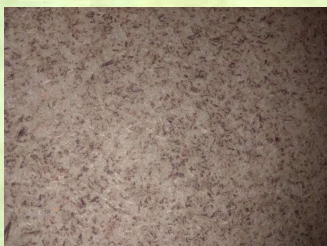
この家の土間は様々な入口を持つ。特に、南北の茶木を繋ぐ通り土間は解放感が強い。建物で茶畑のつながりをさえぎってしまうように思えるが、実は内部でしっかりとつながっている空間である。

土間は、それぞれの部屋を行き来する場所である。生活に身近に感じられる土間は、家族の共有スペースとしてはもちろん、ここに来てくれたお客さんたちがお茶揉み体験などの交流が生まれる空間として使える。茶畑だけでなく、人も繋ぐ土間である。

家族構成

老夫婦 (夫 75歳、妻 74歳)
息子夫婦 (夫 52歳、妻 50歳)
息子夫婦の子供2人はすでに独り立ちしている。老夫婦は元々、この土地でお茶農家をしており、持っていた茶畑の一部を、御茶を楽しめるCafeとして利用する。息子夫婦も経営を手伝い、茶に関する体験イベントを主催するため、同居する。

面積表	
敷地面積	578.34 m ²
建築面積	236.56 m ²
延べ床面積	236.56 m ²
建蔽率	40.9 %
容積率	40.9 %



茶殻を使用した壁材



北側立面図
S=1:100

A-A'断面図
S=1:100